



# ボルネオで考えた中国

サラワク・サバ訪問記

中嶋 嶺雄  
(東京外国語大学助教授)

## 東南アジアの文明と地政

このところ、アジア、とくに東南アジアの諸文化が見直されようとしている。日本人は、戦後のあわただしい高成長のまにまに、欧米の生活文化とソ連や中国のイデオロギー文化ばかりを気にしすぎてきたためであろうか。世界各国との交流と相互依存の関係が今日のように拡がり、大きくなったとき、世界史の教科書に書きこまれてきたヨーロッパ文明、エジプト文明、インド文明、中国文明、そしてインカの文明といった文明の類型化に倦意を覚えるようになる

と、人はその類型化よりも相互滲透の土壌に関心をいだくようになる。南洋社会としての東南アジアは、この点で文明史における一種の「聖域」であったし、その文化を宗教に代表させてみても、仏教、ヒンドゥ教、回教、キリスト教それに土着宗教が混浴した文化のタピスリー(つづれ織り)となっていることは疑いない。このような文化的背景のなかにある今日の東南アジア各国は、アジアを繞る国際政治の流動に半ば押し流されつつ多種多様に錯綜した歩みを

つづけているようでありながら、また半面、依然として茫洋たる南洋社会としての生態的現実をそのまま保持しつづけている。

こうしたアジアの現実のなかに、近年、「中国の影」がますます色濃く投影されつつあり、アジア諸国が今日、「中国の影」との格闘を続けていることについては、いまさら指摘するまでもない。そして私自身も、そのような「中国の影」の陰影を求めて、このところしばしばアジア諸国を訪れることとなった。そうしたなかで、昨春、アジアの国際環境の変動にかんする海外学術調査の一環としてマレーシア連邦のボルネオの地を訪れたときの印象は、これらの問題について一応の認識を得ていたつもりであった私にとっても、きわめて鮮烈なものであり、アジアに拡がる「中国の影」の多様な陰影を改めて再認識させられたのである。

## アジア認識に宿る死角

ところで、東南アジアが今日、脚光を浴びるようになった理由は、もとより様々であろうが、われわれ日本人のアジア認識にはつねに大

きな死角が宿されているのではなからうか。アジアといっても、たとえばフィリピンについては、日本の南の隣国として西太平洋の樞要の位置に存在しつづけていることさえ、しばしば看過されてきたし、南シナ海が東南アジアの中心を占める、海洋戦略上もきわめて重要な内海であることについては、過般の西沙群島・南沙群島事件（一九七四年一月）でそれを十分に知らされたはずであるのに、いまだ一般には十分認識されていない。その南シナ海の南方を塞ぐボルネオ島が、わが国全土の約二倍の面積を有する世界で三番目の大きな島として存在している

### ボルネオ華人の祭り（写真も筆者）

廣澤尊王の祭りに鳳山寺へ集まった善男善女たちは手に手に長く太い線香をかざしている



ことについても、われわれは一般にまったく無自覚のままアジアを考えている。

こんなことを心に反芻しつつ、私は、マレーシア航空のターボプロップ双発機に揺られながら、眼下に広がるボルネオの地を、あかず眺めていた。それは七四年三月十六日のことであったが、機は東マレーシアのサラワク州州都クチンを発って、サラワク州第三省の街シブに向かいつつあった。広大なジャングルの暗緑色の平面は果てしなく続き、そのジャングルの縫ってサラワクの主河ラジャン川は、乳褐色の水面を、まるで地理の教材のように蛇行させている。双発機の高度は低いので、ボルネオの風光は手にとるようわかるのだが、人為に犯されていない自然の姿は、メコン・デルタやスマトラのそれ以上のように思われ、密林と川とのコントラストもより鮮やかである。たしかに、ボルネオの自然は広大で美しい。だが、私はさっきから、機内で次第に憂鬱になってきていた。それは、目指すシブの街も、英領ブルネイに近いサラワク第四省のミリの街も、そして次の目的地であるサバ州（旧英領北ボルネオ）のコタキナバルやサンダカンも、今朝まで滞在したクチン同様、完全に中国人の街、つまり華人社会であって、それはけっしてマレー人の社会ではないことに気づいていたからであり、いや、この広大な自然にもかかわらず、サラワクとサバの両州から成るマレーシア領ボルネオのすべてが、たんにその都市ばかりか農村までも、まるで地衣類の蔽うがごとくに中国人によってすっかり、浸蝕、ないしは、汚染、されつくしていることにはいまさらながらの強い驚きとある種の脅威を、もつと正直に告白すれば一種のやりき

れなさを感じていたからである。そして、昨日、クチンの街をあげてくりひろげられていた中国人の祭りに見た「中国文化」の根強い存在とその強烈な自己主張に、いささか辟易していたからでもある。眼下に見るこの広大なボルネオの地は、一体、どこの国なのだろうか。

### 中国人の国——サラワク

今回の私のボルネオ行きは、マレー人と中国人の複合構造をもつマレーシアにおいて中国人（いわゆる Overseas Chinese について、華僑、華人、中国系市民などとその呼称に気をつかう向きもあるが、私はあえて、そのような呼称にこだわらたくない）の社会的存在が中国を繞る今日のような国際環境の変化のなかで、どのような新しい意味をもつのかを現地において知るためのものであった。だが個人的には、ボルネオ行きは私の秘やかな懸案でもあった。もう半世紀もまえに、エキゾチズムと野性を求めて南洋への放浪の旅を続けたサマセット・モーム描かれたところのボルネオの風光に私はかつて強く魅せられたことがある。そのモームは、このように描写している——「サラワク河。河口は非常に広い。兩岸ではマングローヴやニールバが水に洗われ、その後は緑の色濃いジャングル、そして遙かかなたでは、岬々とした山容が、青空に黒くシルエットをあらわしている。陰鬱な感じや窮屈な気持はなくて、広々と自由だ。陽にはえる緑と、空の色はこころよく明るい。親しみぶかい肥沃な土地へ来たという感じがする」（『作家の手帖』、中村佐喜子訳、新潮社版全集第二十六巻）。



熱帯都市クチンの大通りを練り歩く龍の踊り

また私は、しばらく以前、香港に一年半ほど暮らしていたとき、香港からキャセイ航空の直行便が出ているサバの州都コタキナバル（かつてのジュセルトン）に、中国語では亜庇と呼ばれるその名にひかれて、なんとなく憧れを感じてもいたし、ヒマラヤを除けばアジアで最高峰の赤道直下の山、キナバル山（標高四一〇四メートル）をキリマンジャロと比較して見てみたい気持ちに駆られてもいた。ボルネオ原住民の陸ダヤ族、海ダヤ族の生活実態に触れてみたかったことも事実であり、山崎朋子著の『サンダカン八番娼館』（筑摩書房刊）を共感と不満の相半ばする思いで読んだばかりであったことも、私のボルネオ行きを誘ったのであった。

## 商才過剰の華人社会

このような個人的事情もあって、私にとって未知のボルネオは、大きな期待に胸ふくらむ地であったはずである。だが、結果的には私は、以上の「夢」をすべて現地に果たしながら、ボルネオでの当初の旅程をあえてくりあげて、その地を離れたのである。そして、その大きな理由は、私の訪れたボルネオがまったくの中国人社会であることの苛立たしきでもいったものがあったともいえない。もっと直截に語れば、憧れのコタキナバルにおいても、タクシー、ホテルとすべて中国人であって、このこと自体は言葉の不自由がなければ私には好都合だったとしても、若干の例外を除けば、旅行者にとってはまったく油断のできない商才過剰の華人社会がそこに存在していたからである。コタキナバルの場合、ホテルときたら、並のホテルで不愉快なサービスの連続であるのに、値段だけはボルネオのこの地でなんと一泊三十米ドルという有様である。調査のために、タクシーを雇いあげるときでも、余程ねばり強く交渉し、一旦は、「そんなに高いなら要らない」といわないかぎり、合理的な値段の倍はとられること必定である。

それでも、木材景気で沸いているコタキナバルに比べれば、クチンは、はるかによかった。近郊人口をあわせて約二十万の人口をもつボルネオ最大の都市クチン（古晋）は、モームが描いた情景がいまも残るサラワク河に面した美しい街である。クチンは、英人ジェームズ・ブロークが一八四一年にサラワクを「ホワイト・ラ

ジャー」（白人王）として統治しはじめて以来、ボルネオのいわば玄関口であったが、第二次大戦中は日本の占領下におかれ、一九六三年にサラワクが英領直轄植民地を脱してマレーシア連邦の一州を形成してからは、東マレーシア第一の都市、サラワク州都として今日にいたっている。市の中心には回教モスクが金色の円屋根を光らせているが、クリーム色の緑や橙の明るい壁面の多いその街並みは、南洋華人街に共通のものである。クチンのサラワク博物館は、ボルネオの博物誌やダヤ族の生活実態を研究する者にとって、あまりにも魅力的なものであり、博物学者や文化人類学者が世界から訪れる。もとより私は門外漢であるが、館長がアメリカ留学帰りの若い中国人、ルーカス・陳氏で、この地の代表的な知識人でもあるので、到着早々、私は博物館を見学したが陳氏を訪れ、サラワクの事情をあれこれと聴取した。

## 排他的に純粋性を保つ

だが、私は、その日がクチンの中国人を沸かせる鳳山寺の廣澤尊王の祭りだとは、まったく予期していなかった。午後のスクールを中国式旅館に等しいボルネオ・ホテルに避けて部屋に閉じこもっていると、やがて雨上がりの路上にドラと太鼓の音が響きはじめた。見ると、なにかありそうな気配である。と、またたく間にホテルの外の路上が祭りの舞台に変わって、大変な賑わいになってきた。これはまたとない幸運とばかり、いささか興奮してカメラを肩に飛び出してみると、廣澤尊王聖誕千年の祭りで、龍の踊りや獅子舞、花車、若者たちの西遊記や可

憐な少女たちが綺麗に厚化粧した楊貴妃などの山車が次から次へとくりだして、大騒ぎになってきた。ホテルに近い鳳山寺の門前は人で埋まり、このような出し物が、潮州公会とか福州公会といった地縁血縁の公会や宗親会、サラワク人民連合党、中華国術社、サラワク文化戯劇社などの政治・文化団体によって競われている。廣澤尊王がどのような神仏なのか知る由もなかったが、それが九皇上帝や関帝、観音娘娘などと一緒に祀られているところを見ると一種の道教の神仏なのであろう、鳳山寺はこの地の代表的な道観ではないかと思われる。ともかく、この祭りの喧騒と熱気は圧倒的なものであり、やがて夕開迫るころには、寺院のままで閩劇(福

少年たちの獅子舞



建の芝居)が上演されたり、街中の「善男信女」が手に長く太い線香を頭上にかかげて敬虔な表情で行列し、静々と街を通りぬけていった。

出し物の行列は、おそくまで絶えなかったが、街を埋めつくしてこの祭りに集まっているのは、むろん中国人ばかりである。クチンは今日、れっきとしたマレーシア連邦の州都なのに、そこにマレー人の姿を見出そうとしても、まったく困難なのである。それに反して私は、ここに示された中国人の風俗・伝統・習慣の根強さ、つまりボルネオの地においても排他的に純粹保存されている「中国文化」の強烈で執拗な自己主張に、いまさらながら圧倒されざるを得なかった。

しかも驚いたことに、このように「中国文化」を奉ずるサラワク華人でありながら、そのなかには、とくに青年の場合に、北京語といわず広東語、福建語、客家語などの方言といわず、ともかく中国語をまったく話せない者がかなりいることを、祭りの行列に加わっていた中国人青年に話しかけてみて知ったのであった。

書物をひもといてみると、ボルネオと中国大陸との関係は古く、すでに唐代には「浮泥」、「勃泥」として中国の史書に記録され、のちに「婆羅」として広く知られるようになったが、やがて中国近代史の犠牲者として華僑が流出しはじめた十八世紀後半以降は、福建、広東の両省を中心に続々と中国人がこの地にやってきた。この地に入植した中国人たちは、ジャングルを蛇行しつつしばしば猛威をふるったラジャン河をはじめとする河川とのたたかいに精根を尽くし、やがて「河の支配者」となることが

できた。そして、二代目ラジャール、チャールズ・ブルークから、カピタン・チャイナ」の称号を贈られた劉建発、王友海、田亜考の三人のサラワクの有力華僑は、いずれも前世紀中葉にこの地に渡来して農園経営、海運、貿易、鉱山開発などで巨大な富をなし、それぞれ一族と彼らを慕って中国大陸からやってきたその縁故者によってサラワク華人社会を牛耳ってきたのである。(Elizabeth Pollard, *Kuching Past and Present* および山下正雄「サラワクの華人たち」、『問題と研究』一九七三年五月号、参照)。今日、サラワクの中国人は、客家、福州人、福建人、潮州人、広東人、興化人、海南人の順位で人口の多い順に分けることができるが、人口の点では、とくに客家と福州人が多く、サラワク華人の大半を占めている(Michael

Leith, "The Chinese Community of

Sarawak"参照)。最大の人口をも(客家は、サラ

ワクにおいては社会的に比較的劣勢に甘んじてきたが、かつて十八世紀から十九世紀末まで、客家・羅芳伯が築いた鉞山コンツェルン・蘭芳公司は、カリマンタンのボンティアナクに本拠をおいてボルネオ西部一帯に強大な力を及ぼし、ここに「華僑王国」を築いて、一時は清朝にさえも叛旗をひるがえす雄を示したのであった(小林文男「サラワクの華僑」、『アジア経済』一九七〇年五月号、参照)。

このような歴史があるだけに、今日、サラワク華人の八〇パーセント以上は数代にわたる中国人の現地出生子孫であり、マレー語優先というマレーシア政府の言語政策のためもあって、彼らのなかには、もはや中国語を話さない中国人も成長しつつあるのである。だが、このこと



少女たちの扮するあでやかな姿の楊貴妃と女官

は、すでに見たように、そのまま現地民族との融合や同化を意味するのではなく、宗教を異にするマレー人（その多くが回教徒である）との通婚もないだけに、精神的・文化的には、かえって純粹中国人としての意識を強めるようである。いわゆる僑生として、日常的にマレー語を話す中国人たちは、西マレーシアのマラッカやペナンではババ（Baba）とも呼ばれているが、しかし私がクチンで見出した現実から感じたことの一つは、言語使用の類型を華僑の民族的アイデンティティの指標にしようとする従来の華僑理論では、こうした新しいタイプの中国人のメンタリティーと民族的志向性をとらえきれないのではないか、という疑問であった。

## マレーシアの将来にとって

ところで、サラワクにおいては、もとより中国人が人口構成の第一位の比率を占めている。しかも彼らは都市と農村の経済を決定的に左右し、商人、ゴム園や鉱山の経営者、手工業者として活躍しているのみならず、農業にも従事していることが他の東南アジア諸地域にくらべて特徴的である。つまり、一部の富裕華僑が経済を独占しているばかりか、すべての経済活動が中国人の手中にあるのである。因みに、一九六六年の人口統計によれば、サラワク州の総人口八十六万のうち、中国人が二十八万人で全体の三二・七パーセントを占め、次は現地人であるイバン族（海ダヤ族）の二九・四パーセントであり、マレー人はなんと一七・九パーセントにしかすぎない（M. G. Dickson, "Sarawak and Its People", 参照）。こうして、まさにサラワクは、「中国人の国」なのである。このようなローカルな現実のなかに、多民族複合国家としてのマレーシアが今日存在しているのであって、そこでの実態的な「中国」との格闘こそ、現在進行中であるマレーシアの国民形成と統合にとっての重大な問題になっているのである。こうした状況は、旧英領北ボルネオのサバ州においても基本的には同じだといえよう。北ボルネオのシンボル、キナバル山は、「中国寡婦山」とも書かれるが、山に靈石を求めに入った中国人が龍に呑まれて帰らず、夫の帰りを待つ寡婦が籠の村に残されたという悲劇の伝説から、このような名前がつけられたことを知ったとき、それは中国の華南一帯に見られる遺難漁師の寡

婦伝説と共通のものであることがわかる。このことにも示されるように、「中国」はボルネオ奥地にも深く広く根を張っている。

そのような地の中国人たちが、今日の中国を繞る国際環境の流動化のなかで、まさにはじめ「親に別れた孤児のように知りもしない親を慕うような気持ちで、その親がどういう親であるかは穿鑿せず、とにかく親の膝下におりさえすれば」（吳濁流『夜明け前の台湾』に描かれている中国人の「祖国愛」、参照）という心理状況に移行しつつ新しい民族的意識性を探りはじめるとしたら、ボルネオの華人社会は、マレーシアの将来にとって、かつて一九六九年のクアランプールにおける凄惨な人種暴動（五・一三事件）と同様の社会的摩擦の噴火口にもなりかねないのではなからうか。

## 分離独立の可能性も

もとより、このような見方とは別の点についても考えてみなければならない。それは、サラワクにおいてもサバにおいてもマレー人はあまりにも少数であり、一方、この地の中国人は、かつての蘭芳公司が示したように伝統的に「独立・自治」の気風に富んでいることである。ボルネオ華人たちの多くは、サラワクやサバをすでに久しく「祖國」と考えてきたのであって、そのためにこそ、たとえば辛亥革命前後に孫文の特使がこの地に支援を求めてきたときにも、他の華人社会とは異なって、彼らの反応はきわめて消極的であったといわれており、その後も中国大陸の政党政派に系列化された政治の動きは少なかつたのである。このことが、まさに

「中国人の国」であるにもかかわらず、この地の調和をこれまでは保ってきたのであろうか。この点では、今日、サラワク州政府の与党である人民連合党もかつては「サラワクの独立」を唱えていたし、サラワクの進歩派や毛沢東主義者もその動きに乗じようとしたのであった。このような方向は、西マレーシアのような深刻な社会的亀裂をこの地域にもたらさなかった原因であったが、しかし、ひとたび政治的・社会的安定が崩れた場合、かつてマレーシア連邦形成の際にも見られたように、それがサバ、サラワクの「分離独立」への動きに転化する内発的エネルギーにもなり得るであろう。それだけに、マレーシア政府はサバ、サラワクの安定化に多くの意を用いてきたのであり、その安定を脅か

出し物は公会や宗親会、文化団体によって競われるが、やはり「西遊記」は欠かせないようだ



すサラワク・ゲリラにたいしては、硬軟両面の作戦をとって精力的に対処してきたのであった。では、そのサラワク・ゲリラは今、どのような状況にあるのであろうか。

## サラワクのゲリラたち

サラワクのみならず、東南アジアで一般に「中国の影」を色濃くしている問題の一つに、この共産ゲリラの問題があることはいうまでもない。これら共産ゲリラ勢力は、第一に、そのほとんどが毛沢東型ゲリラ革命を信奉し、第二には、そのリーダーもしくは構成員の多くが中国人であることによって、「中国の影」をいやがうえにも増殖させてきたのである。去る七四年五月二十日に実現した中国とマレーシアとの国交交渉において、ラザク政権が中国側とねばりつよく交渉し、これらゲリラ勢力にたいする中国の不干渉という保証をとりつけたものと推測されているのは、マレーシア政府自身もこれまで、こうしたゲリラ勢力に悩まされつづけてきたからにはかならない。今日、マレーシアのゲリラ勢力は、タイ・マレーシア国境のペラ州を中心に陳平書記長のもとで活躍し、「マラヤ革命の声」として知られるマラヤ共産党(MCP)と、東マレーシアのサラワク共産党(SCCP)を中心とする「サラワク人民武装勢力」(北京放送)とに大別される。そして前者については、かつて、幻の共産党といわれ、反英独立闘争で知られたマラヤ共産党の陳平とマラヤ連合時代のラーマン首相が一九五五年十二月、タイ国境に近いケダー州のバーリンで歴史的な会見をおこなったとき、陳平が「共産主義者と非共

産主義者の共存はあり得ない」と語ったこともあって、マレーシア政府側はつねに大きな脅威を感じてきたのであり、一九六九年の五・一三事件(クアラルンプールを中心にマレー人と中国人が対立した凄惨な人種暴動)をもたらした影の鼓吹者も「中国人共産主義者」であると主張されてきたのである(Tunku Abbul Rahman, May 13: Before and After, 参照)。

## ゲリラ勢力の掃討に努める

一方、マラヤ共産党とは別個の組織である「サラワク人民武装勢力」は、マレーシア連邦形成期に、スカルノ時代のインドネシアがマレーシアの結成に強く反対し、これを中国が支援して「マレーシアの名で立ちあらわれた新植民地主義」を激しく非難し、北および西カリマンタンの人民武装闘争を強く鼓吹したこともあって、マレーシア政府としてはマレーシア存立のためにもこれを許容できず、これまでも絶えず大がかりな掃討作戦を展開してきたのであった。

そして、その「サラワク人民武装勢力」は、ボルネオの地の複雑な歴史的歩みを反映して、同様に複雑な組織的変遷を遂げてきた。サラワク共産党は、すでに第二次大戦直後に成立したといわれ、六二年末のブルネイ反乱以降、武装闘争の段階に入ったが、かつてラザク首相自身が「SCP五〇〇を支援している主要源泉はサラワクの中国人である」(一九七〇年十二月三日のクチンでの談話)と語っていたように、そのメンバーはすべて中国人だといってもよい組織である。もう一つの勢力である北カリマンタン人民軍(PARAKU)は、ブルネイ反乱の

指導者でブルネイ人民党首アザハリを中心に結成され、ブルネイ反乱やサバの領有権をめぐる、それぞれインドネシアとフィリピンがマレーシアに対立した六〇年代初頭のマレーシア結成期には、北カリマンタン人民軍による「北カリマンタン国樹立宣言」がフィリピン、インドネシアの支援を背景に発せられたことさえあった。アザハリがインドネシア共産党（PKI）と密接な関係があったことも知られており、それだけに、一九六五年のインドネシア九・三〇事件以降は、PKIの残存分子が「サラワク人民武装勢力」に混入したともいわれ、マレーシア政府は大がかりな野戦旅団を編成し、ある場合には勇敢なダヤ族を投入してゲリラ勢力の掃討に努めたのであった。このような情勢不安からサラワクでは、六二年のブルネイ反乱以来一貫して夜間外出禁止令がしかれていたが、私が当地を訪れた昨七四年春、十二年ぶりに解除されたのである。すでに一部では報ぜられたように、サラワク・ゲリラの大量投降があったからにはかならない。すなわち七三年十月以来、サラワク武装共産党のリーダー黄紀作が武器を棄てて「森林を出た」ことが確認され、七四年三月四日にはその数は四百八十二人になったと発表された。しかも、これを迎えた州政府は、これまでの態度とは打って変わって、彼らを手厚く遇し、投降ではなくてあくまで帰順のだとさえいっている。私がサラワクに滞在したのは、彼らの大量帰順が伝えられた直後であったが、サラワク州政府の楊国斯・副首相は、この点を「州政府の開明政策および人民のために服務する努力が、サラワク共産党の森林での活動目標と一致したので、双方が協力

しあって人民のために服務するという点で一致に達したのだ」と語っていた（『山打根日報』一九七四年三月十七日）。サラワクもサバも、州首相はいずれもマレー人であるが、私には、この黄紀作に代表される中国人ゲリラ勢力と、サラワク客出身で立志伝中のインテリ政治家である中国人副首相・楊国斯とが、「為人民服務（人民に奉仕する）」という『毛沢東語録』の代表的な一句を共通の言葉として一致したという事実が、きわめて印象的であった。いうまでもなく、サラワク・ゲリラの大量投降は、中国とマレーシアとの国交がいよいよ近いことも示唆したのであった。

はたして、七四年五月二十日、マレーシアは、懸案の中国との国交樹立を実現した。今回の対中国交渉において、マレーシア側は、こうしたゲリラ勢力の問題で北京の保証をとりつけるとともに、中国人問題についても、とくに約二十五万と推定される無国籍中国人にたいし中国政府が触手をのばして彼らを北京政権の「第五列」と化することのないよう、十分の保証をとりつけたはずである。サラワクやサバのように、非マレー人のマレーシアを内にかかえるマレーシアにおいて、このことは当然の措置であったと思われるが、対中国交は、やはり将来にわたって内政的に「中国の影」に対処してゆくための「保険」として選ばれた一つの賭けとしての意味をもつものであり、マレーシアの対中傾斜を即座に意味するものではないと思われる。

この点では、中国内政の流動的な状況を反映してか、サラワク・ゲリラの大量帰順ののちにも北カリマンタン共産党中央委員会議長は声明を発表して武装闘争の継続を叫んでおり、その

声明を中国が公表してこれに激励を与えている事実（北カリマンタン共産党中央委員会議長声明「武力による国家権力奪取の道を歩みつづける」、『北京周报』一九七四年第十号、参照）もやはり指摘しておかねばならない。

## 進取の気風に富むダヤ族

サラワク、サバのような、中国を内にもつホルネオ社会の将来は、どのような道のりをたどるのであろうか。私は、ホルネオでの一日、かつては首狩り族だといわれた陸ダヤ族の居住している Long House（原始的ながらきわめて合理的に集団生活の知恵を働かせた竹製の長屋住居であり、彼らの部族間の襲撃にそなえて、そこに共同生活を営んできた）をジャンブルの奥地に訪ねてみたが、ホルネオの中国人の方が、強固な「中国文化」の殻のなかでより伝統的・旧守的であるのにたいして、むしろダヤ族の方が開放的で進取の気風に富んでいるのではないかとさえ感ぜざるを得なかった。クチンのサラワク博物館に隣接する文化センターには、きわめて流暢な英語を話すイギリス留学婦りの若い女性が仕事をしていたが、その美しい女性は陸ダヤ族だということであった。

いずれにせよ、アジア諸国の国民形成と国民統合との道のりには、なお多くの曲折が予想されるだけに、われわれはまずアジア諸地域のローカルな現実にもっと着目せねばなるまい。なぜなら、そのようなローカルな現実のなかにこそ、アジアの流動と混沌の、同時にその魅力的な文明の源泉が存在するからである。

（なかじま・みねお）

# 論展

The Ronten  
6月号

昭和50年6月1日発行  
(隔月刊)第2巻第3号  
通巻第8号

特集●強くなりすぎた!?戦後女性像  
地方自治から地方政治へ 住民運動の今日的意義 阿部 齊

